日本財団 The Nippon Foundation 助成事業

「第４回笹川杯日本知識クイズ大会優勝者訪日団」感想文

（平成 19 年度）

財団法人日本科学協会

この招聘プログラムは、競艇の交付金による日本財団の助成金を受けて実施します。

目　次

概要紹介……1

訪日感想文……3

訪日代表団　団長　　佳木斯大学外国語学院　院長　　張　鳳傑……3

浙江工商大学　日本文化研究所　事務員　　宋穎……4

佳木斯大学　日本語学部４年　　李楊……5

佳木斯大学　日本語学部４年　　孫妍……6

佳木斯大学　日本語学部４年　　林文来……7

佳木斯大学　日本語学部４年　　金暁環……8

長春師範学院　日本語学科４年　　王芳……8

長春師範学院　日本語学科４年　　呂鑫……9

浙江工商大学　日本語学部２年　胡傑……10

南京大学　日本語学部４年　　張穎……11

貴州大学　日本語科４年　　周進軍……12

安徽中澳科技職業学院　日本語科３年　　孫文博……12

浙江工商大学　日本語学部４年　　張叔傑……13

浙江工商大学　日本語学部４年　葛燁……15

長春師範学院外国語学院 副院長　劉艶……16

佳木斯大学　日本語科４年　　朴美玲……17

長春師範学院 大学院生　王越……17

長春師範学院　日本語科４年　　金梅花……18

湖州師範学院　日本語学科４年　　顧雅芳……18

南京大学大学院　日本語科２年　王重斌……19

南京大学　日本語学科４年　初延安……20

東華大学　日本語研究科　２年　黄霞……21

中国海洋大学　日本語研究科　２年　張潔……22

上海杉達学院　日本語学科　４年　張定彦……23

浙江工商大学　日本語学部　４年　孫燕……24

＜概要紹介＞

2007 年 9 月に中国の 3 地域（黒龍江省、華東地域、吉林省）で開催した「笹川杯日本知識クイズ大会」の優勝者等の訪日団 26 名（学生 22 名、引率者 4 名）が、2008 年 1 月 24 日から 8 日間の日程で来日し、様々な日本を実体験しました。

来日した 22 名の学生は、豊富な日本知識を誇るクイズ大会の覇者たちですが、殆ど（22 名中 16 名）は来日経験がなく、本物の日本に触れて知識を確認することは、日本語を学び始めて以来ずっと抱いていた長年の夢だったのです。東京、沖縄、神戸、大阪、京都と各地を巡り、日本の大学生との交流を始めとした様々な実体験を通して知識や友情を深めた 8 日間は、彼らにとって、自らの五感で日本を学ぶ旅であり、「“知日派”になる大事な第一歩」であり、また、「行動を共にし、本音で意見を交換することによって、相手を理解し、友情を育む」旅だったようです。

★東京大学

中国の学生たちが真っ先に体験したいと思ったのは、日本の大学でした。キャンパスや学生たちの中に自らの身を置き、その雰囲気を体感すること、それは、日本を学びたいと思っている学生にとって自然な欲求です。

東京大学は学生たちにとって最も関心の高い大学の 1 つで、本郷キャンパスを訪れた学生たちは、伝統ある建物や冬枯れのイチョウ並木が醸し出すアカデミックな雰囲気を体感しながら広い構内を散策し、正門、安田講堂、三四郎池、赤門とポイント、ポイントで写真に収まって、「中国の友だちに見せてあげたい」と嬉しそうに話してくれました。

★日本の大学生との交流

訪日団26人の他、日本の有志の大学生14人（慶応義塾大学7人、法政大学3人、専修大学2人、一橋大学1人）、中国の大学からの研修者 1 人、同行取材の記者4人の総勢45 名の参加者が、日中混成の6 グループ（7～8 名）に分かれ、それぞれが思う“日本”を求め、それぞれの企画に沿って自由に交流しました。この“日本”とは、秋葉原、上野公園、渋谷、銀座、東京タワー、東京ミッドタウン、お台場のパレットタウンであり、地下鉄であり、食文化でありと多種多様でしたが、中国側の“見たい日本”が反映されていると同時に、日本側の“紹介したい日本”も盛込まれており、グループ毎に特徴的なものでした。

★戦争の悲劇

「ひめゆり平和祈念館」を訪れた学生たちは、戦争の悲劇を伝えるひめゆり学徒の証言者の声を聞き、また、その悲惨

さを物語る生々しい資料を目の当たりにして、大きな衝撃を受け、「今まで知らなかったことを初めて知った。その時の人たちは本当に可哀そうです。事実を忘れず、今の平和をもっと大事にしたい。」と平和の大切さを改めて痛感しているようでした。

★美ら海

沖縄の海の美しさ、エメラルドグリーンに輝く海と白い砂浜のコントラストは、これまで海を見たことがない学生（22 名中 9 名）は言うまでもなく、それ以外の学生にとっても、格別だったようです。内陸育ちで海を見たのは初めてという湖州師範学院の顧雅芳さんも、その時の感激を「海は、そのまま、うそのように私の前に広がっている。手を開けて、この世さえ自分の胸に抱きしめた気がしました」と、訪日感想に書いています。

★京都の名刹

金閣寺と清水寺を見学しました。「京都と言えば？」と尋ねると、「金閣寺、清水寺」と口を揃えて答えてくれたように、古都の歴史、文化を知るためには、この 2 つの寺院は欠かせない場所のようでした。

金閣寺では、鏡湖池に映えるまばゆいばかりの美しさに心を打たれ、清水寺では「“清水の舞台から飛び降りるといわれる舞台”を自分の目で確かめることができた」と感激していました。

★きもの文化

日本語のみならず、日本を多角的に学びたいという学生たちにとって、きもの文化も例外ではありませんでした。帰国の前日、京都の土産物屋でゆかたと帯を買った彼女たちは、どうしても日本滞在中に着物の着付けを習得したかったようで、ホテルに戻った後、日本側担当者に「ゆかたの着方を教えて欲しい」との要請がありました。午後 11 時からホテルの一室で始まった着付け講習は、受講生の熱心さによって延々と続けられ、4 人の着付けが完成した時には既に日付が変わっていました。

襟の合わせ方（左を上に）から始まって帯の結び方まで、一通りの手順を教えられた学生たちは、完全に習得したとは言い難い感じでしたが、他の学生の着付けを手伝いながら復習し、完全にマスターしてしまった学生もいました。

これらの他にも沢山の貴重な実体験をした彼らは、深められた日本知識を土産に、1 月 31 日、関西国際空港から帰国しました。中国に戻った学生たちは、訪日の印象が鮮明なうちに感想文にまとめて私どもに送ってくれましたので、中国語の感想文は原文に忠実に翻訳して、日本語の感想文は原文を生かして手を加えずに掲載しました。

財団法人日本科学協会
教育・研究図書有効活用プロジェクト室

訪日感想文

★中国語原文

※原文に忠実に翻訳して掲載しました。

訪日代表団　団長　　佳木斯大学外国語学院　院長　　張　鳳傑

日本旅行の所感（まとめ）

日本財団および日本科学協会からご招待いただき、中国 2007 年笹川杯日本知識クイズ大会の各地区優勝者と大会主催者からなる訪日代表団が、2008 年 1 月 24 日～1 月 31 日、日本で八日間の見学を行いました。

私は中国の大学で日本語専攻の教壇に立ち 24 年にもなり、日本で学習や生活をした経験もあります。幸いにも今回の訪日代表団の団長となり、かつてない感慨と収穫がありました。短いものの充実し、集団学習と娯楽、視野を広げる活動と語学の実践が一体となった、楽しくて忘れがたい旅でした。

＊独創性のある行程と、多彩で充実した内容

今回の訪日は八日間で、国際移動の時間を除くと、日本滞在時間は六日間でした。このわずか六日間の間に、訪日代表団は東京、沖縄、京都、神戸、大阪といった五都市を回り、日本財団と日本科学協会に表敬訪問しました。東京大学、沖縄平和祈念館、阪神大震災記念館などを見学し、また新聞の取材も受けました。

東京では、代表団の全員がかつての東京－浅草を見学し、現代の東京である船の科学館にも訪れ、お台場一体から国際的な現代都市の息遣いを感じ取りました。中国の大学生たちに限られた時間の中でより日本を理解してもらうため、今の大学生生活に近づいてもらおうと、日程中には原宿の散策、日本の大学生との一日観光などの活動も含まれていました。中国で日本語を学習している大学生たちには実践的な時間そして空間となりました。わずか六日間で、寒風ふきすさぶ東京から海水浴のできる沖縄まで、訪日団は日本の美しい自然を鑑賞し、各地それぞれの日本食を味わい、日本人の愛する温泉浴も体験しました。見学旅行を楽しんだ以外にも、「日本知識クイズ大会交流会」、「中日大学生交流会」なども開かれ、今回の旅行はより興味深く充実し、多彩なものになりました。

＊日本語能力実践としての行程、全体的な資質を問われる旅程

今回の訪日団員は、中国の各大学で日本語を専攻とする優秀な学生です。日本を訪れることができたことで、長年学習してきた日本語を母国語とする日本で実践できるという疑いなく貴重な機会を得ました。今回の行程では時間が限られており内容も多かったのですが、学生たちはそれぞれの時間を大事にして、最大限に自分の夢を実践しました。日程の中には早起きや夜更かしが必要なものもありましたが、団員たちはとても自主的に積極的に協力し、時間を守りました。どんなことでも熱心に取り組み、現代中国の大学生の精神を見せてくれただけでなく、日本語専攻の学生たちは日本文化から影響や薫陶を受けた、勤勉さ、まじめさ、信用、実務に励むといった優秀な品格を体現してくれました。中国の大学教師の一人として、最もうれしく誇らしく感じたことです。

＊実り多く意義深い日本の旅

日本旅行の日程がとても合理的で内容も充実したため、意外な収穫をも得ることができました。新聞の取材を通じて、学生たちの音声や映像がテレビ、ラジオ、インターネットにそれぞれ載り、勢いづいた学生たちが「川流会」を結成しました。このことは日本知識クイズ大会活動の新しいマイルストーンとなり、より多くの日本語学習者と中日交流に有用な空間を提供するものとなります。今回の日本旅行における実りの一つです。

今回の日本旅行は、多くの中国大学生に人生で初めてのことを実現させました。初めての飛行機、出国、海、震災の爪

痕の見学、テーマ旅行、取材される体験、たくさんの日本語専攻学生とのふれあい…
こうした初めての数々は彼らを未知の空間へ連れて行き、その夢を一つ実現させました。人生で初めてのことはきっと、すばらしく忘れがたい記憶として一生残ることでしょう。

浙江工商大学　日本文化研究所　事務員　　宋穎

訪日の感想

1 月 24 日～31 日は、充実した旅の八日間でした。

それまでは、色々なことが他人の描いたものばかりでした。日本は中国国内の大都市とそっくりで違和感がない、日本は言葉にならないほど清潔だ、日本人は電車内でしゃべらず静かにしている、など。中国のことわざに、噂は当てにならない、見るものこそが本当というのがあります。今回、幸運にも日本知識クイズ大会の入賞した選手達と自ら日本を体験することができました。これから、見聞した中で印象深かったものを復習してみたいと思います。

初日の日本到着は夜でした。私たちを乗せた大型バスは東京市街地へ走り、まちまちながら秩序のある公告灯が宵闇に浮かぶ様子しか見えませんでした。路上には通行人も少なく、にぎやかな喧噪があり、歓声が沸き立つ都市だと思っていた東京も、本来はやはりライトアップされた場面だけだったのだなと感じました。これが日本に着いて最初の感覚――静けさです。

日本では午後 9 時になると閉店しだすところが多いので、夜は町歩きに最適とは言えないのですが、これもまた初日から感じた夜の静けさです。もちろん、この手の静かさは夜の日本の専売特許というわけではありません。日本の電車でも同じような感覚を受けました。乗客はきちんと座り、うとうとしたり、本を読んだりしていて、立っている人がたくさんいても無表情に乗車しており、会話がたまに聞こえても声を抑えたものでした。このとき乗った電車では、携帯をいじっていたり、大声を出したりといった人は見あたりませんでした。中国国内での公共交通機関では見慣れて少しも珍しくない光景なのですが。

「静か」の他には、「清潔」という印象があります。以前から日本は清潔だと聞いていたものの、何も特に感じてはいませんでした。しかし日本の通りを歩いてみると、本当に言葉にならないのです。果物の皮や紙くずもなく、目障りな痰の跡もなく、歩道も車道も清潔でした。横断歩道や車道の中央線などが記してある他は、道路そのものの濃い色でした。路上はゴミ箱一つ見つけるのすらたいへんなほど清潔でした。テロリストに危険物を置かれないよう予防するのと関係あるのかもしれませんが、日本人には歩きながらものを食べる習慣がすくないので、通行中に捨てたいものがあったとしても、まずは持ち歩いてゴミ箱のある場所に行ってから捨てるのでしょう。しかも普通のゴミ箱には分類があります。日本人の環境意識には敬服せざるを得ません。

日本の建物は中国と比べると「小さくて細長い」もので、建物同士の間隔も明らかにとても狭いのですが、密集して建っているのに乱雑な感じがありません。初めはこの違和感が言葉にできなかったのですが、後になって徐々に気づきました。そもそも日本の建物には明らかに中国で言う「違法建築」がないので、「ぎっしり」な印象があるのです。空間が十分に使えるかは面積の広さによるのではなく、いかに合理的に十分に利用するかにかかっています。他にも、建物として最も重要なことはやはり実用性であり、ランドマーク性が第一ということは決してありません。私たちが見学した東京大学の外観については、赤門の入り口に着いたとき、少なからぬ学生がいたるところから「東京大学」の看板を探していました。この名門校に立派な正門がないとは、しかも有名な「赤門」さえ普通の赤く塗った木製の門で何も特別さがないとは信じがたいものがありました。キャンパス内の建物は少なからぬ「年期」を漂わせていたぐらいで、何もすごいところはありませんでした。東大そのものが名を轟かせる看板だから、何も鮮やかな外観で明示する必要がないのです。この質素さには殊勝なものがあります。身の処し方もこのとおり実務的でなければと思いました。

こうした外観のショックいがいにも、異なる生活習慣がいくつかありました。日本の人々が秩序を守るふるまいも忘れられないことでしょう。日本を小さなエスカレーターに喩えてみると、中国より狭くても、そこで「渋滞」に遭うことはありませんでした。東京ではエスカレーターに乗るとき、人がみな自主的に左側に立って右側を空けます。急いでいる人が通りやすくなるためで、とても秩序だっています。また、日本の道路も十分に広いとは言えないのですが、道路の渋滞やバス待ちの長蛇の列などには出くわしませんでした。もちろん、交通指導をする警察官もほとんど見あたりませんでした。東京や大阪の路上では信号の出現率が高くても車の通行速度に影響を与えていないようでした。日本に着いたとき、道路を渡るときは信号を守れと口酸っぱく言われました。ドライバーは信号で通行の可否を判断するから、信号無視をするとはねられる危険性が高くなるとのことでした。

今回の訪日で、中国側の学生と日本の大学生数人が交流を持ちました。特筆に値するのは、私たちの訪日はちょうど日本の大学で試験期間中だったのですが、皆さんは自分からこの交流活動に応募して参加したということです。交流はチームに分かれて行なわれました。各チームの中国側教師と学生 2 名が日本の大学生に同行してもらい、行きたい場所（東京）に行き、一緒に乗車し、会食して、直接的な相互理解を深めました。皆さんとの交流で、日本側の学生はとても大人だと気づきました。一方では小さい頃からの教育なのかなと思いましたが、一方では彼らの社会経験から来ているものもあるに違いないと思います。なので、真面目さや優しさといった長所に気づくのは簡単でした。彼らのうちの多くが仕事も持っており、しかも従事する業務も幅広いものでした。私のチームだった高塚さんは神社に勤めたこともあるそうです。しかし中国の大学生にはアルバイトをする人が少なく、しかもファーストフード、スーパー、衣料品店の店員か家庭教師に集中しています。あるいは、日本の学生は豊かに社会を見ているため、人との接し方がより社会人に近いというのが適切でしょうか。

もちろん、私たち中国の学生も交流でよくやっていました。日本財団の会長を表敬訪問したときにはきちんとふるまっており、わがままや私語を抑えていました。しかし同い年の人に会うと、距離のようなものがぐっと縮んだのか、夜に訪れた船の科学館では日本に着いてから見聞したことや思ったことを熱心に語り合っていました。このとき、私たちの学生も少しは大人のふるまいができました。つまり、異国の地の発達ぶりを目にすると同時に自国と自身の足りないところに気づき、謙虚に受け止めて改めていこうと思うようになったのです。勉強好きで、優れたものを自分の欠陥と比べて迅速に吸収する——これこそが私たち学生の特徴だと思います。中日の学生が相互に理解したと同時に、良好な関係を築くことができました。今回の学生交流は短いものでしたが、とても価値があったと思います。この他、書かずには置けない嬉しかったことがあります。私たちの訪日団——黒竜江省、吉林省と華東地域の数大学からやってきた学生が非常に打ち解け、美しい沖縄を観光した興奮もあり、顧先生の提案で「川流会」を結成し、以降の連絡がしやすくなったことです。私たち学生が見せた活力や開拓精神にはとても感染力があったようで、すぐに同行の先生方や記者の皆さんも巻き込んでしまいました。

たったの八日間で日本のあちこちを巡り、はかなく通り過ぎてしまったものの、毎日を充実して過ごすことができ、多くの新鮮な感触が得られました。もちろん、これは私の一方的な感覚なので客観性は足りないかもしれませんが、本当に感じたことなのです。

佳木斯大学　日本語学部 4 年　　李楊

忘れがたい日本旅行

8 日間の日本訪問は短いながらも充実したものでした。私が日本へ行ったのはこれが初めてで、日本語専攻の学生の一人として、興奮と幸せを感じるあまり眠れなくなってしまいました。

今回の訪問を通じて、日本の現実について多くのことを理解し、日本の風土や人情を実際に体験しました。私が想像し

ていた日本と現実の日本には異なる点がたくさんあり、また現実の日本にはより多くの意外な喜びがありました。

まず、日本の空港に着陸したときから感じたのが、日本人の親切さと礼儀正しさ、そして空港の設計もとても計画的なものでした。

東京の夜景は私の想像を超えるほどではなかったものの、とても静かでした。町中も宿泊先の部屋も静かでした。日中、東京の緑化状態がよく空気がきれいであることに気づき、意外でした。経済や科学技術が早く発達した都市は往々にして環境整備を怠っていると感じていたのに、東京は緑に囲まれていたからです。中国から日本に来ると色々なものがひしめきあっているように感じます。東京は広くないので、ある場所から次の場所まで移動するのも車に乗ればすぐです。しかし東京の都市計画はとても整然としていて、交通も便利でした。

東京では日本の大学生との交流もあり、とてもいい感じでした。実はそれまで日本の男性をあまり好きではありませんでした。男性主義のような感じがしていたからですが、今回チームに入った小林さんはとても紳士的で、日本の男性に対する内心の歪んだ印象を改めてくれました。

この 8 日間で最も印象深いのは沖縄で海を見たことです。海を初めて見たわけではないのですが、こんな美しい海は初めてでした。澄み切っていて底が見えていました。みんなとの遊びも面白く、特に夜の討論会では誰もが積極的に発言していて、とても盛り上がりました。録音しておかなかったことが悔やまれます。もう一つ、大きな収穫がありました。7/19、川流会の結成です。第一期会員になれたことはとても光栄です。

日本からの帰国後に感じたことは、日本に着いたときに感じたことよりたくさんありました。飛行機を降りて最初にしたことは、リュックを前にかけたことです。距離を実感し、本当に自分の責任を意識しました。

つまり、今回の日本の旅は忘れがたいもので、日本の先進性も自身との距離も、まして私の両肩にかかる責任も忘れがたいということです。

最後に、日本財団と日本科学協会に心から感謝します。この機会により日本を訪れたことで、大きな収穫がありました。ずっと私たちに同行してくださった顧先生やその他の日本側の事務局の皆さんもありがとうございました。本当にお疲れさまでした。

笹川杯がより盛んなものとなり、川流会がより大きくなることを心よりお祈りします。

佳木斯大学　日本語学部 4 年　　孫妍

沢山の初めてに出会った日本旅行

今回の八日間という日本旅行は短いものでしたが、とても感動を覚えました。私の人生の中でも重要な旅であったと思います。

まず、私にとって生まれて初めてのことばかりでした。飛行機に乗るのも、出国するのも、あんな綺麗な海を見るのも初めてでした。実践こそが本当に知ることなのだと実感を持って知ることができました。一万冊の書物より万里の道を旅するべきだと本当に感じたのです。あの海は本当に美しくて、やわらかい砂浜を歩き海に向かうと、春もうららな実感がありました。海水が足に打ち寄せると、その暖かく澄みきった海水は本当に私が憧れていたものでした。お天気はあいにくだったのですが、雨の中たくさんの珊瑚や貝殻を拾いました。その瞬間は実にすばらしいものでした。夕方、私達は海風に向かいながら、たぎる感動を胸に、見聞きしたことのあれこれを、腹を割って話し合いました。先進国には確かに優れたところがあり、国民の資質も交通も我が国にはまねのできないものだと体験できました。日本人は仕事熱心で、サービス態度は和やかで親しみやすく、交通機関はきわめて便利で、私たちは赤面しました。

日本が中国と比べこれだけ優れているところを目にして、炎黄の子孫としての私には何かしなければならないなという責任を実感しました。微力ではありますが、志を持って努力さえすれば鉄棒を針にまで磨き上げることができるでしょう。

日本科学協会、日本財団がこのよい機会を下さったことに感謝したいと思います。先生のお心遣い、学生の皆さんの熱心さと友情によって、全国各地からの仲間がこの美しい日本に集えたことにも。期間は短かったものの、私たちの友情の花はとこしえに咲き続けるでしょう。私たちは「川流会」を作ったので、きっと信念を保ってよりよくしていこうと思います。

佳木斯大学　日本語学部 4 年　　林文来

自分から、今から始める日本理解

楽しむことに忙しい、というのが今回の日本旅行で一番思ったことです。

東京のにぎやかさ、大阪の活気、沖縄の熱心さ。それに古寺の静謐さ、温泉の満足、海の果てしなさ。目の前に広がる、いきいきとして、私が知らなかった日本。詳しく知っていると言えば、以前に本などの媒体で無数に日本と関わる情報にふれていることもあり、よく知り抜いています。知らないと言えば、初めて足を踏み入れるこの地で自ら感じる文化。そして自分の想像していたものとの違いも気づきました。

イメージしていた日本の若者は前衛さが誇張されているファッションでしたが、原宿に行ってみると、そこで売られているものは中国でも手に取れるような感じで、服やアクセサリ類も中国のものと大差ありませんでした。そこにいた学生達が冬以外は露出度が高いというのさえ、特に変わった装いでもありません。ファッションを掌握しているのは結局少数なのです。大部分の人の生活は中国人とそれほど差のあるものではありませんでした。日本人はきちんとしていて軽々しくしゃべったり笑ったりしないものかと思っていましたが、日本の大学生との交流と沖縄でのガイドさんから、日本人も楽しければ大声で笑うし食べながら歩くこともあるし、電車でおしゃべりしたりもするのだと気づきました。ですが彼らのサービスの周到さと何でも全体で相談する姿勢には納得せざるを得ませんでした。

今回の視察訪問日程はスケジュールがぎっしりで、多くの場所がよく見られませんでした。そばの説明をちょっと見たり同じものをよく見たりしようと思うと、毎度のように間に合わなくなり、落伍してしまったりもしました。清水寺などは、古い木造建築であると知り、帰国後に資料を調べてみると、ねじくぎを全く使わない建築法であることがわかりました。その時に気をつけて観察しなかったことが今はとても残念です。しかし、より多くの場所を見るためです。スケジュールがぎっしりなのは仕方ないことで、浅く広く学ぶということは一つを選んで深く究めることと矛盾した心理状態を生み出しました。日本を訪れる方としては当然、見識がより多くなるほうを希望します。しかしこのように表面だけざっと見るというのは浪費であり、惜しいと感じました。そこで先生に提案があります。観光地を見学する前に関連資料をいただけないでしょうか。一行がそれぞれ行動できるし、写真ぐらいしか印象が残らないといったことも防げると思います。チケットを買うときに少しは説明がありましたが、時間の関係で詳しく読むことができず、流れに従って歩くことしかできませんでした。

名勝を観光して、美味しいものを食べて。この八日間は本当にあっという間でした。みんなと築いた友情、波の音をバックにした激しい討論、そして川流会の結成のどれもが忘れがたい経験です。

見学して遊ぶ楽しみの中で私がより感じたのは、上には上があるという競争感と次の世代としての使命感です。どうして自分の日本語は交流にうまく発揮できないのだろう？自信とレベルとどちらが足りないのだろう？どうして日本の町中にはゴミ箱がないのにこんなに清潔なのだろう？中国では、ゴミ箱は緑化樹木のように町中に並べてありますが、ゴミは道のいたるところで目に付きます。本当に国民の資質の違いなのだろうか？一部から全貌を推察すると、些細なことから全体のことが分かります。そこで、社会全体をきれいに掃除しようと思ったらまずは一部屋からだという道理を深く体感しました。何事も自分から、今から始めないといけません。今の立場からすると、新社会人として、日中両国の関係改善

というのは偽であり、両国分かの理解を基礎として周囲の人の両国に対する見方にある誤差をできるだけ改めていくことが真です。一部の日本人にとっての中国人は、まだ半纏におさげでロバに荷車を引かせています。同様に、一部の中国人からは、海を隔てて見えるもの全てが軍刀を手に「バカヤロー」と叫ぶ憎むべきジャップに、私たちのような日本語学習者は売国奴に見えています。これらはいずれも解くことができる誤解です。私たちが交流とコミュニケーションを望み、互いに相手を理解しようとすればよいのです。今回の訪日などはとてもいい形です。こうした活動が今後も「川の流れのようにやまない」ことを本当に望みます。

私もここに、「笹川」事業が日増しに向上発展することを祈ります。

佳木斯大学　日本語学部 4 年　　金暁環

忘れがたい思い出

今回の日本滞在はわずか一週間しかありませんでしたが、私にとっては忘れがたい永遠の思い出となりました。

初めて海外に出る興奮は抑えきれないものですが、日本の地に足を踏み入れた時、やはり見知らぬ国に来てしまったという不安がありました。しかし忙しいスケジュールに追われているうちに、そんなことはあっという間に忘れてしまいました。自分にとっては、東京の高層ビル街よりも、静かな沖縄の風景の方が好きになりました。特に沖縄の青い海！生まれて初めて見た海がこんなにも透明で美しいものだとは知りませんでした。そしてその美しい風景は私の脳裏にとても深く刻み込まれました。また、沖縄の伝統舞踊を通して日本の文化に更に近づけたように思え、私は日本のことをもっと知りたくなったのです！

それから期末試験の忙しい時期にも関わらず、東京を案内してくれたりいろんな話をしてくれたり、丸一日付き合ってくれた日本の学生にも本当に感謝の気持ちでいっぱいです。日本の若者が中日友好のためにさまざまな努力をしている姿を目の辺りにし、とても感銘を受けました。そして日本財団と科学協会の方々も、実にきめ細かいおもてなしをしてくださいました。温泉体験や金閣寺、清水寺見学、おまけに日本人にとっても贅沢なしゃぶしゃぶ料理までご馳走になり、本当に素晴らしい体験をたくさんさせていただきました。笹川杯の活動はこれからもっと広い地域で展開されると思いますが、もっとたくさんの人がこのような素晴らしい体験を経験できればと心から願っております。

しかし日本の高度な発展を目の前にすると、やはり両国の差に気づかないわけにはいきません。中国はこれからまだまだ努力しなければならないところがたくさんあります。またそれと同じように、自分も日本に来て初めて自分の日本語はまだまだ駄目だということに気づきました。中日両国の人はお互いのことを理解しようと一緒に努力して、初めて永遠の友情を築くことができるのでしょう。

素敵な日本の旅を提供してくださった日本財団と科学協会に本当に心から感謝いたします。どうもありがとうございました！

長春師範学院　日本語学科 4 年　　王芳

友情について

2008 年 1 月 24 日～1 月 31 日は、私の人生 21 年のうちで最も忘れがたい、記念すべき 8 日間です。この 8 日間で出国したのも、これほどたくさんの友達とふれあったのも初めてで、中には記者もいました。この 8 日間の旅行は団体旅行で最も楽しく、最も収穫のあるものでした。顧さんと日本科学協会、日本財団に感謝します。このような素敵な機会を下さったおかげで、大学生の内に日本を味わうことができ、この感動は永久に心に残ると思います。

8 日間の旅路で最も印象深かったのは沖縄です。砂浜で走って談笑して、あいにくの雨に遭いましたが、濡れた髪と服、ぱたぱた鳴るスリッパ、それでも誰もが楽しんでいました。たった一つ残念だったことは、荒縄でくくられたあの袋を開けてみなかったことです。帰国してからずっとその中身が何だったのか気になっています。後から「縁のない相手なので、もう諦めよう」と慰められました。沖縄に着いたのは 4 日目でした。私たちは互いに理解できていて、海を見られるという興奮もありました。私の家は海から近いのに海を見たことがなかったのです。それでも海は人を傾倒させる魅力がありました。感情がヒートアップしていく中、海の抱擁のおかげかもしれませんが「川流会」が生まれました。川流会はきっと川の流れのようにやまず続いていくでしょう。

最後の一晩も忘れがたいものです。日中は清水寺のあるお店で皆が浴衣を買い、そのお店がほとんど空っぽになってしまいました。ホテルに戻った私は矢も楯もたまらず試してみたのですが、服はどうにか着たものの、帯がどうしても結べず、しばらく苦闘したのですが、ついにお手上げとなりました。それで吉田さんと宮内さんに助け船を頼むと、お二人とも長いこと着ていないとは言いながら、着方は覚えていたようで、手順を一つ一つ見せて教えてくれました。この帯の締め方は本当に特別で、お二人の助けがなかったら、私たちだけで帰国しても着ることができずただ見るだけしかできなかったことでしょう。そこで何人か女子学生が自分で着てみたのですが、着崩れしている人がいたり、帯がしっかり締められない人がいたりで、お互いに見合って、皆で大笑いしました。帯締めを手伝って、着付けを手伝って、と頼み合い、長いこと苦戦してついに成功し、本当にとてもきれいにできました（私が言っているのは浴衣のことです）。何人かの男子学生が部屋から出てきて、廊下でいっしょに写真を撮りました。1 人の外国人が長いこと私たちを笑って見ていて、皆は声を抑えて笑いました…

別れの日、宮内さんは鳴いていました。きっと女子学生も少なからず忍び泣きしていたと思います。一緒にいた時間は短くすぐにさよならとなってしまいましたが、日本への旅によって出会えたことは、私たち全員が一生忘れないと思います。

長春師範学院　日本語学科 4 年　　呂鑫

尊ぶに値する人、尊ぶに値すること

帰国からもう二週間になりますが、ぐずぐずしてしまいペンを執って気持ちを整理できずにいます。

本当にすばらしい思い出なので、どこからお話しするべきか分からなくて。ここでは日本から得た直感的なものだけ簡単にふれたいと思います。

透き通るほど清潔な国だということは、飛行機を降りてすぐに深く感じました。道ばたにはほとんどゴミ箱がありません。駅にはところどころ見かけられますが、それも分類のあるもので、燃えるゴミ、燃えないゴミ、新聞紙、ペットボトル、缶などがありました。国全体の国民が環境を守るために努めているのです。こういう環境に身を置くと、自分にも自然と移ってくるのか、この環境を壊すことはできないなと思うようになりました。とても印象深いできごともありました。夜 9 時ごろ、何人かと約束してホテルの近くを散歩していたのですが、そのときある通行人がゴミ箱のそばで煙草を吸っているのが目に入りました。煙草を吸いながらその燃えかすをゴミ箱の中に落としていくのです。その人はまるまる一本を吸い終わってからその場を離れました。通行人は既に少なかったので、その人も他人の視線を気にしてそうしていたわけではないでしょう。ただ自主的に自分のすべきことをしていたのです。各人が環境の保護を自分の責任だと考えているのですね。

日本はとても秩序のある国だという感覚もあちこちで味わいました。自主的に整列乗車しており、押し合いの様子は見られません。しかしそうすることでむしろ速く乗車できるようになり、効率は上がるのです。日本では特権の存在が見られず一人一人が独立した主体なのですが、国家元首たりともそれを理由に並ばず乗車できることはないでしょう。信号無

視をする人はなおのこと見られませんでした。

日本人は礼儀を重んじます。日本人は毎日のように「すみません」を口にし続け、自分に非があるかに関わらず、ご面倒をおかけしました、すみません、と言うのです。エレベーターを止める時さえ、運行速度に影響するためか、居合わせた人に謝ることがあります。中国人は小学生のうちから、いかに他人の面倒ごとを解決するか学びますが、日本人はいかに迷惑をかけないかを学ぶのです。これは国と国との違いで、もしかすると日本が島国だからなのかもしれません。日本の社会は非常に「冷たい」もので、日本社会では兄弟と呼び合うような親密さが見られません。路上では人とお喋りしながら歩いたり、手に手を取って歩いたりという人がとても少なく、人と人との間には一定の距離が保たれていました。君子の交わりは淡きこと水のごとし、という中国の古い諺を反映しているのでしょうか。

日本人は非常に仕事熱心で、なぜそうするのかというと、日本のサービス業は世界でも一番だからです。誰もがまじめにこつこつと自分の職分を守り、仕事以外のことに煩わされることがあまりありません。できる限りのサービスをお客さんに提供し、サービス中はずっと微笑みを浮かべています。お客さんの内心で意に沿わないことがあっても、一瞬で消えてしまいます。都庁を見学したときエレベーターガールを見かけました。彼女の仕事は、観光客をきちんと並ばせ、エレベーターが来たら乗れる人数を数え、ボタンを押します。観光客が揃ってから上階へと移動し、続いて次の観光客を迎えます。彼女の一日の仕事はこうしたもので、上下に何往復するのか分かりません。しかしうんざりしたような表情は見せず、終始微笑みを浮かべて一人ずつ観光客を迎えます。彼女もまた都庁の美観の一部なのです。

日本でのわずか 8 日間は、ふだんのちょっとしたことからも震撼できるものでした。私たちが日本から学ぶべきものは多く、科学技術の発達や経済の発展だけでなく、意識の向上こそより多く学ぶべきだと思います。一種の進んだ国家、高度な文明と軌を一にする意識です。

自分の目で見て、自身で体験してから、外の世界がなんとすばらしく自分がなんとちっぽけなことか知りました。自分に足りない点がたくさんあること、自分の日本語レベルがまだまだなこと、考え方に浅はかさと幼さがあったことに気づきました。万巻の書を読むのは万里の道を征くにしかず、という古い諺をふと思い出しました。

今回の日本旅行では多くのものが得られました。初めて飛行機に乗り、温泉に浸かり、国を出て、長く憧れていた日本にやって来ました。中でも最も尊いのは、これだけたくさんの友達と知り合えたことです。これは一生ものです。今でも集まったときの喜び、別れのときの涙は深く印象に残っています。日本科学協会の各位による私たちへの行き届いた配慮にとても感謝しています。特に顧先生の親切さはお母さんのようでした。この短い数日間で、人となりも処世の面でも先生から学んだものはたくさんありました。空港で別れるとき先生と抱擁して、無限の暖かさと力を感じました。

人の一生には誰でも、尊ぶに値する人、尊ぶに値することがありますが、私は今回の日本旅行でそうしたものを得ることができました。ずっと大事に記憶にとどめ、一生の宝物にしたいと思います。

浙江工商大学　日本語学部 2 年　胡傑

日本に学び、学ぶに値するすべての人から学ぶ

今パソコンの前でこの文章を書くに至るまで、この短かった 8 日間の日本旅行を忘れていません。

皆の喜ぶ笑顔、顧先生の行き届いた気配り、そして何よりこの数日間に知り合った日本の友達の皆が忘れられません。

これだけ忘れられないのは、自分の身の上に変化が起きたこと、日本の友達が心から関心を寄せ優しくしてくれたこと、日本の進んだ息づかいを本当に感じ取ったからです。

覚えているのは、関西空港の免税店をうろうろしていたとき、きれいな包装をされたおみやげをとても買いたかったのですが、引き返してしまいました。勇気がなくて、言葉の違う人との交流が怖かったのですが、自分が大学二年生だから

というだけの理由でした。ですが環境の刺激と友達からの励まして、買い物はこんなにも簡単なものだったのだと気づくことができました。この 8 日間で自信と勇気、そしてより日本語を学ぶ力を得ることができたのです。

私はまた、中国帰国のため関西空港に向かうバスの中で宮内さんがくれた別れの言葉を覚えています。宮内さんが名残惜しくて流した涙も覚えています。そのとき、私は見たのです。中日友好関係に友情の橋が架かるのを。たった 8 日間ですが、この橋はここまでも堅固で、壊すことのできないものです。目の前がかすんできても、私たちは車外の友達にずっと手を振ろうと努めました。

東京で地下鉄を待っていたとき、日本人が自主的に秩序よく並び、押し合いも割り込みもしないのを目にしました。中国国内での状況との強烈なコントラストには心から震撼してしまいました。私は確実に、日本が私たち中国より進んでいるところを感じました。かつては四大文明の発祥地と称えられた「中国」が今や文明上の廃墟になってしまったのだなと感慨を禁じ得ませんでした。ですが決して悲観しているわけではありません。反対に、心に熱くこみ上げるものを感じました。それは愛国心です。この心さえあれば、沈んだ太陽もまた東の空から昇ってくるのだと信じています。

そしてこの一切の重い責任は、今の大学生である私たちにかかっています。私たちはこの使命感を持って、顧先生に学び、日本に学び、学ぶに値する全ての人から学び、中日関係の錦に花を添えるのです！

南京大学　日本語学部 4 年　　張穎

たくさんの友達が何よりの収穫

八日間という時間は瞬く間に過ぎましたが、今回の日本への旅が私たちの心に残したものは八日間どころか八週間でも足りないほどのもので、一生忘れがたい記憶となりました。何年もたってからこの絵巻を開いても、ありありと目に浮かび、鮮やかに蘇ると思います。

この八日間は初めてのことばかりでした。日本に上陸したのも、自身が日本文化を体験したのも、こんなに多くの熱心で友好的なみんなと旅行したのも、海の広さを味わったのも……この貴重な経験はしっかり心にとどめておきます。自分の目で日本の世の中にあるさまざまな光景を収集し、自分の耳で日本のいろいろな面を捉えたいと思っていたのですが、時間が短かったのでどうしても残念なところはありました。でも今回の日本旅行で得られたものはたくさんありました。

日本の道の清潔さはとても深く印象に残っています。首都である東京だけでなく、南方の小島である沖縄も風情の違う関西も、こうした清潔さに違いはありませんでした。こうした環境で、こんなに清潔な地面を見るに、恐らく勝手にゴミを捨てる人などいないのではないかと思います。良好な環境は人の資質を養うのに重要な要素の一つです。目や耳から覚えていく中で自然にその環境と合致した生活法を選んでいくようになります。中国にはこの面で不足があります。中国の膨大な人口や教育の普及率とも大いに関係があります。最も重要なのは自分から行動し身近な人を動かすことです。一人が十人、十人が百人を動かしていけば、中国も人々の賞賛を集める美しい都にできるだろうと信じています。一人が十人、十人が百人を動かしていけば、中日の友好や交流も日に日に深められるでしょう。

今回の日本旅行で最も大きかった収穫は、とてもたくさんの友達と知り合ったことです。中国の友達、日本の友達、団体を作って訪日するという形式は大いに利益となりました。宮内さんはお姉さんのように面倒を見てくれました。熱心に街を案内してくれたり、手を取って和服の着方を教えてくれたり。彼女の仕事に対する真面目さと責任感にはとても感動しました。別れのときに宮内さんは涙を浮かべていました。私たちみんなに彼女の気持ちは伝わりました。宮内さんと心が通じたのだな、と感じました。

愛すべき浅山さん。彼は口数こそ少なかったものの、仕事を少しも疎かにせず、私たちのためにあらゆる便宜を尽くしてくれました。観光地に行くたび浅山さんは目印に立ってくれました。一人一人の団員が安全についたか確かめ、労苦を惜しまずはぐれた団員を捜してくれました。内心では彼をずっと尊敬していました。浅山さんの笑顔は深く印象に残って

います。彼はいつも笑顔で仕事に向き合っており、満面の笑みで人と交わっていました。彼の笑顔の中には熱心さが感じ取れました。

親しみやすかった顧先生。時には厳しくルールを教えてくれましたが、勿論それも必要なことでした。実際には誰よりも私たち一人一人に気を配っていて、一人一人の安全を心がけていてくれました。顧先生は華奢な体に二十何人もの安全を背負いながら笑顔を絶やすことはありませんでした。本当に愛すべき人です。

また、訪日の機会を提供してくださった笹川会長、随行してくださった尾形理事長、みんなを楽しませてくれた朱さん、四人の芸達者な随行記者の皆さん、そして私たちの若き会長、黄金の喉を持つ金梅花さん、李楊さん、子供のような宋先生、少数派の男子数名、沖縄のかわいいガイドさん、交流を持った日本の大学生、そしてもっとたくさん。彼らは皆、得難い友人で、大事な記憶です。ご一緒した時間は短かったものの、喜びの歌や笑いの場面の一つ一つが次々と思い出されていろいろと味があり、千言万語に代えて微笑むよりありません。

私たちの友情をしっかり心に刻み、伝えてゆき、微力ながら中日友好に貢献したいと思います。中国の伝統的な祝日が訪れるとき、新春の祝福を申し上げましょう。新年おめでとうございます。

貴州大学　日本語科 4 年　　周進軍

訪日感想文

まず、今回、日本科学協会の招聘により中国各地から来た優秀な大学生たちと一緒に日本を訪問することが出来たことは非常に光栄であり、とても嬉しく思っております。

今回の日本への旅により、本当の日本を感知し、今まで本の中で読んだ抽象的な日本文化を体験することができました。今回幸いにも日本文化を具体的に体験することができました。日本科学協会が手配して下さったスケジュールに対し非常に満足しており、最短の時間内に最大限度の日本社会、文化、名所旧跡などを体験させていただきました。その行き届いた対応に感激しました。

今回の日本への旅の収穫は大きかったです。中国のたくさんの友達と知り合いになったばかりではなく、日本の友達も何人かできました。その友達と問題を深く掘り下げる時には語学の面でまだ問題がありましたので、お互いに相手に自分の考え方を知ってもらおうと必死になりました。そして、こうした現象は、非常に良いことだと思います。日中交流においては、このような学生間の交流こそ必要ではないでしょうか。

今回の日本への旅には、もう一つの収穫があります。私たちが「川流会」を設立し、相互交流に力を尽くすことです。この川流会を益々発展させるように皆で頑張りましょう！

安徽中澳科技職業学院　日本語科 3 年　　孫文博

未来を変える知識と力を持った新たな時代の大学生として

八日間の旅といえばとても長いように思っていましたが、実際に来てみると八日間の旅はあっという間に過ぎ去ってしまいました。

正直日本に来る前は、自分は日本語専攻の学生で第三回華東地区笹川杯という日本に関する知識を競い合うコンテストで優勝していたこともあり、日本のことならある程度のことは理解しているという自負をもっていました。しかし実際日本に来てみると、いろんな意味で大変衝撃を受けました。

飛行機を降りてすぐ感じたのは、空気がとてもきれいなことでした。至るところに美しい風景が広がり、素晴らしい自

然を随所に感じることができました。日本といえば、環境保護への取り込みと国民の教養の高さが広く知られていますが、実際来てみるとさまざまなところで感心させられました。東京の街で３０分、いや１時間歩いたとしても地面に落ちたごみを見かけることはありません。しかしながらゴミ箱がたくさん設置されたわけでもなく、一つの通りにゴミ箱一つも設置されていないこともしばしばあります。ゴミ箱が少ないのに街の環境がこんなにも清潔に保たれているなんて！正直たいへん驚いたと同時に、心から感服せざるをえませんでした。

日本人への印象といえば、礼儀正しく謙遜な国民、というイメージを持っていましたが、今回日本にきて日本の方々は本当に親切だと思いました。われわれを迎え入れてくれた日本財団、日本科学協会の方々は、実にきめ細かく来日メンバーの面倒をみて下さって、労を惜しまず見学スケジュールをアレンジして下さいました。中日交流イベントに参加した東京の大学生は親切に上野公園や秋葉原を案内してくれたり、好奇心豊かな私たちの質問に少しも面倒臭がらずに丁寧に答えてくれたりしてくださいました。本当に心から感謝します。

またもっとも印象深いのが、どんな場所においても、日本人はみんな自覚をもって行動していること。自分の振舞いによく気を使っていて、周りの人に迷惑をかけていないか常に気を配っていました。また、困っている人には自然に手を差し伸べ、助けようとするのです。滞在中の８日間は、乱れた行列を一度も見たことは無く、公共の場で大きい声で騒ぐ人を見かけることもありませんでした。エスカレータに乗る時はみんな自然に左に並んで急ぐ人のために右側を空けておくし、電車や飛行機に乗る時は、いつも周りは静かで快適。至るところに分かりやすい標識が置かれていて、道をたずねれば警察も通行人も店員さんも、必ず親切に教えてくれます。

この８日間、私たちは東京の都庁に登って、この近代都市を眺めその美しさに感嘆し、沖縄の海辺にいっては波と戯れ、また明石海峡の岸辺に立っては阪神大震災で亡くなられた方の冥福を祈りました。そしてとうとう訪れてしまった別れに気づいた時には、思わず涙が顔を濡らしていたのです。

この８日間、わたしはまだ中国では見られないものをたくさん学べたような気がします。未来を変える知識とパワーを持ち合わせた新しい時代に生まれた大学生として。また、実際日本にきてさまざまなことを見学できた恵まれたものとして。そして「川流会」の一員として、私たちはこの旅で聞いたこと、見たこと、また実際に触れた日本の素顔と日本の友達のことを自分の心に深く記憶しておくだけでなく、周りの人々にも自分の感じたことを伝えなければいけないと強く感じました。

中国の古い詩にこんな一句があります：花を見た帰りは馬の蹄も薫る。わずか８日間の旅でしたが、わたしにとって８年にも匹敵するほどの貴重な出会いとたくさんの啓発がありました。この８日間は永遠に私の記憶に刻み込まれることでしょう。中日友好が大河のごとく永遠に続きますように。そして「笹川杯」と「川流会」がますますの発展を遂げますように、心から祈っております。

浙江工商大学　日本語学部４年　　張叔傑

６日間の随想

＊1 月 25 日　晴れ　新幹線　東京へ

日本に来て初めて、話に聞いていた新幹線に乗り、とても興奮しました。中国国内で和諧号に乗ったことはありますが、それともだいぶ違う感じでした。周りは誰もが日本語を話す日本人で、私は中国語を話す中国人だからです。新幹線で三時間、途中の主要駅は京都、名古屋、静岡、新横浜、そして日本の首都――東京に到着しました。東京駅を出て目を向けると、誰もが慌ただしい出立のようでした。日本人に恥じない、毎分毎秒を浪費しない働きマンです。

＊1 月 26 日　晴れ　東京めぐり

朝食　お粥定食。初めて日本でお粥をすすり、ザーサイを食べました。故郷の味がしました。郷愁。

チーム活動では第4組に。井口光吉、池田昭博、張穎、顧雅芳、金暁環、張叔傑、付穎。

チームで皇居の写真を撮るが、集合写真を撮りそびれました。残念。遠くの東京タワーは「ぽきぽき」、ふと呼び声のようなものを感じました。

浅草の雷門で、26人の集合写真を撮影。「deng」の音にみんなが笑いました。

チームは解散、雷門で付さんの取材を受けました。生まれて初めて記者の取材を受けたので、それはそれは緊張しました。取材される感覚というものがこうならば、以降はもっとうまくできるようになりたいと思います。

自由活動　渋谷109、NHK、代々木体育館前の街頭音楽フェスタ、明治神宮、原宿、レインボーブリッジ、お台場、フジテレビそして観覧車。いずれも表面を一度ざっと見るだけでしたが、日本の学生との交流で、日本の若者の文化をより多く理解することができました。新しい体験でした。

中日学生交流会では、おのおの自分の意見を述べて、言いたいことを思う存分言いました。言葉の壁もなく、国籍の違いもなく、若者と若者がふれあいました。一日の東京での体験を全て言葉に出し尽くしました。

その後、東京タワーとレインボーブリッジの夜景が見える船の科学館でビュッフェ。幸せ。

＊1月27日　雨　東京から沖縄へ

3時間ほど飛行機に乗り、ついに那覇空港へ到着。ずっと行きたかった沖縄、19度。空気の分子一つひとつに海の匂いが溢れていました。暖かな幸せ。ただいま、沖縄。

＊1月28日　雨　沖縄

ひめゆり平和記念資料館は、戦後に生まれ育った子供である私たちに戦争の残酷さを教えてくれました。一枚一枚の絵や写真、一文一文の文字に胸が締め付けられ、言葉にできない沈んだ気分に。ただ黙祷を捧げて亡くなった方々の冥福を祈り、世界平和と中日友好を願うことしかできません。

首里城は見たことがあるような感じがして、古代王朝を夢に描きました。沖縄は中国ととても複雑な関係を持つ地方で、ただ違う生い茂る木の陰だけが、ここは日本だと気づかせてくれました。

海辺では大きな子供も小さな子供も砂浜で思いきりはしゃぎ、駆け回り、写真を撮りました。蒼い空と海、白い雲と砂。夢に見た冬の沖縄をついに自分で体験できて、本当にこの上ない幸せでした。誰もが喜び、はしゃいでいました。砂浜全体にさわやかな笑い声が響いていました。すばらしい風景を享受すると同時に、私たちも風景になっていました。

食後、波の音をバックに私たちは自由討論を行いました。日本について、訪日について、よいところ、改めるべきところ。いつの間にか1時間半もたっていました。余韻は尽きません。最大の成果は、川流会を結成したことです。私たちの友情も川流会とともにたえず育っていくと思います。

＊1月29日　曇り　神戸

10:05離陸、さようなら、親愛なる沖縄。

大阪に到着…

有馬温泉は、日本三大温泉の一つです。日本人の温泉好きは来日よりだいぶ前から耳にしていました。今回、天然の温泉を自ら体験できたことは、本当に興奮するものでした。唯一残念だったことは、温泉玉子がなかったことです(笑)。

三十分ほどお湯につかると、バスや旅の疲れが吹っ飛びました。日本人が何故ここまで入浴好きなのかがやっと理解できました。一日の仕事から帰ってお風呂に浸かると、仕事の悩みや疲れを解消できます。入浴の習慣がない国の人も試してみることはできるし、効果的だろうと思います。

＊1月30日　晴れ　京都

金閣寺。天気予報では雪が降るとのことでした。雪が大好きな私としてはいたく期待していました。金閣寺は前にも一度、訪れたことがありますが、白い雪が黄金の屋根を覆って水に映える金閣には別格の風情があるに違いありません。しかし天気は思うようにならず、期待は空振りに終わりました。ですが皆と一緒に金閣寺を見学するのも慰めにはなりました。まあ楽しかったからいいです。

清水寺。日本には大小の寺院がたくさんありますが、清水寺はそれでも一見に値するところです。景色はこの景色ですが、人は違います。今こうして清水寺を見学している気分は 2 年前とはっきり違い、単純だったものが複雑になりました。まさに「毎年花は同じように咲き、年々人は変わってゆく」ということです。

地主神社。大吉、良い前兆。

かに道楽。送別会。別れという単語はずっと考えたくもなかったのですが、出さずにはいられません。8 日間の旅が、今夜で幕を下ろします。名残惜しいものの、時間の短さを一瞬で体験できました。

東京、沖縄、神戸、京都、大阪 8 日間の旅は瞬く間に終わってしまいました。名残を惜しみながら寒風の中、皆と別れを告げました。たった 8 日間、厳密には 6 泊 7 日ですが、知らない人が知り合いになり、なじみ、友達になりました。皆さんありがとうございます。また日本ですばらしい思い出ができました。皆さんを忘れません。私たちの川流会はずっと続いていくと信じています。

顧先生を初めとする日本科学協会の各位（宮内さん、浅山さん、吉田さん）と日本財団、まさに皆さんが苦労して開催した笹川杯日本知識クイズ大会が、大会に参加して入賞し訪日する機会を与え、日本の東西南（北）それぞれの風景と文化を体験させてくれたのです。

一日一日を記録できればと本当に思いますが、文字にするとここまで弱々しくなってしまいます。ですが、私たち皆は最高の記録を記憶として大事にし、永遠に忘れないと信じています。

浙江工商大学　日本語学部 4 年　　葛燁

日本への旅

日本での懐かしい旅の出来事を再び思い出そうと、感じたことを書き出してみることにしました。時の流れとは無情なもので、つい先日の心打たれた思い出が色褪せてしまっているのではないかと正直心配していました。しかしいざ筆を取ってみると、日本で体験した事柄が昨日のことのように、より強く一層鮮やかに私の目の前に蘇ってきました。

今回の旅は自分にとって二度目の訪日になります。一回目は大学２年の時で、その時は一年間日本に留学をしました。しかし今回の「日本の旅」という意味においては、初めての訪日だと考えられると思います。東京、沖縄、神戸、京都、大阪と、私たちは日本中を旅することで、地理的にも人文的にも、また、歴史から文化にいたるまでさまざまな形で交流を計り、人々の心にじかに触れることができました。

空港に降り立つと、知らない土地なのにどこか見たことがあるような懐かしい風景がありました。高層ビルが建ち並び、車が流れるようにせわしなく行きかい、道行く人も自分達と同じような黄色い皮膚と黒い瞳でした。日本もインフラ面では自分の国とさほど差がないと思い、正直ここ数年母国の急速な発展を心から誇らしく思っていました。しかし、すぐに気づいたのは、形のない「ソフト」の面で、まだまだその部分には大きな開きがあると実感したことでした。街にはごみのかけらもなく、信号を無視する通行人も見当たらない。クラクションを鳴らす騒音も無く、大声で騒ぐ人もいません。特に印象深かったのは、地下鉄のエスカレーターで右側を通行人にあけるように、みんな自然に左側に並ぶシーンでした。思えば中国の階段は、前の人達が横並びでふさいでしまうことが多く、急いでいるときなどは追い越そうにも追い越せなく非常に大変です。約 65 億人もの人間が住んでいるといわれている地球で、誰かとふれあうこと自体が一つの縁だとしたら、どんな時でも他人に思いやりを持つべきでしょう。日本では「遠慮」という言葉がありますが、その意味をより深く理解できた気がしました。

今回の旅で幸運にも、日本人でもあまり行ったことがない沖縄を訪れることができました。平和記念館を見学した時、平和の大切さを切々と感じました。そして中日の友好関係をより強く、より継続的に発展させなければならないという信

念と情熱がますます高まりました。記念館でおばあさんの戦争の悲惨な体験を聞きながらふと思ったのは、どんな国でも苦難の歴史があるということ。お互いの理解を深めるにはまずお互いのことを知らなければならないと感じたことでした。あの時のおばあちゃんの面影から、なぜか小さいころ祖母から聞かされた波乱と苦難に満ちた過去の日々が思い浮かびました・・・

本場の沖縄料理でもてなしを受けた時、幸運なことに沖縄独特の伝統芸能「琉球舞踊」を鑑賞することができました！美味しいものをいただきながら美しい舞踊を眺める、まさに一石二鳥！極上のひと時でした！

沖縄に続き神戸、京都、大阪にも訪れ、それぞれの地方の地理、歴史、文化に直に触れることができました・・・

別れが近づいた時は本当に後髪が引かれる思いでした。別れたくないのは、8 日間も一緒に過ごした先生と仲間だけではなく、日本財団/日本科学協会の先生や、記者の方々、1 日しか時間がありませんでしたが、一緒に熱く語り合った日本の友人達でした。同じ国同士の連帯感も、日本で堅く結ばれた友情もどちらも大切なものだと感じ、別れを目の前に涙が止め処もなく溢れて来ました。

★日本語原文

※原文を尊重して手を加えず掲載しました。

長春師範学院外国語学院 副院長　劉艶

感動した一週間

私たちは「日本知識クイズ大会」の優勝チームの一員として、日本科学協会と日本財団の招きで、2008 年 1 月 24 日ら 2008 年 1 月 31 日まで一週間ほど日本を訪問しました。これは私の 12 年ぶりの訪日でしたが、私にとっては日本の人情味と風景を満喫した一週間で、忘れがたい一週間でした。

一週間はたしかに長い旅ではありません、しかし、私にとって、今回は終生忘れ難い感激の日々が続き、収穫の多かった訪日でした。雪の降る東京から桜の咲き始めた沖縄まで日本の美しい自然風景を楽しく満喫しました。そして、特に日本人との交流で真に日本人への理解を深めました。前に何度も日本へ行ったことがありますが、今度のように毎日日本人と一緒にいることは今度が初めてでした。本当に日本人の親切と熱心をしみじみ感じました。笹川会長をはじめ、大島会長、梶原義明常務理事など沢山の皆様のご歓待を頂きました。空港への出迎えから表敬訪問、送別会など、日本人の方の親切な接待と行き届いた手配、何から何まで丁重なお世話を頂き、私たち訪日団一行全員が大感激でした。

そして、今度の一週間でもう一つ大きな収穫は、「日本知識クイズ大会」が自分の組織を持ったことです。つまり、「川流会」が誕生しました。これはこれからの交流にとっては重大な意義を持っていると思います。これからの中日交流は川流のように末永く絶えず流れていくよう、私たちががんばっていきたいと思います。

最後にもう一度私たちに訪日のチャンスを与えてくださった日本科学協会と日本財団の皆様に感謝の意を申し上げます。また、ずっと私たちに至れり尽せりのお世話をしてくださった、全ての関係者の皆様に、特にお姉さんみたいな顧さんに感謝いたしております。わたしは「川流会」の会友として、ぜひこれからの中日交流に力を尽くしたいと思います。

佳木斯大学　日本語科 4 年　　朴美玲

自分で感じた本物の日本

今度の日本旅行は私にいろいろないい思い出を作ってくれました。初めての外国旅行で、初めて一週間内に五回の飛行機に登って、初めてたくさんの日本大の学生と交流して、初めてインタビューを受けて、初めてテレビに出て、初めて中国の各地域の日本語専門の学生が集まったのです。

今度の日本旅行を通じて、私は普段学校や本で勉強できなかったことをたくさん勉強するようになりました。学校や本の中で勉強したのはただ自分なりに感じた日本だったです。日本に行って本物の日本を見て、自分が感じたのと違うことを発見しました。テレビや本で日本は規律をちゃんと守る国だということを知っていましたが、行って見たら、電車に登るときもゴミを捨てるときもいろいろなときも私の周りとは違って私を感動されました。こういう点は私たちが勉強しなければならないことだと思いました。

そして、今の若者の言葉というのは本当に考えられないものだということも分かりました。本で勉強した文法などと違って新しい使い方でした。例えば、「全然」の使い方や「ありがとうございます」の略「あーざあす」などは学校では勉強できないものでした。

今度の旅行は日本財団と日本科学協会のお招きで行ったのです。おかげさまで東京、沖縄、京都、大阪、兵庫などいろいろなところに見学しました。今度の旅行をきっかけに、私は微力ですが、中日両国の新しい年代の架け橋になって、両国の友好交流のために捧げたいと思います。

長春師範学院 大学院生　王越

永遠の思い出

幸運なことに日本科学協会及び日本財団に招請されたので、2008 年 1 月 24 日から 2008 年 1 月 31 日まで日本を訪問しました。その間に見た人、物及び感じたことで忘れた記憶はありません。

厳冬期に日本に来ましたが、日本人の方の熱い友情から春のような暖かさをしみじみと感じました。そのように感じたことは枚挙にいとまがありません。

私が就職できたことを知った梶原義明常務理事は、何度も励ましてくれました。宮内さんがいつも親切に当地の風俗の情報を紹介してくれたり、記念写真を撮ってくれたりし、みんなの世話を熱心にしたことは、感動させずにはおきません。困ったとき、中日文化に精通した顧先生は、いつも思いやりのある方法でヒントを与えてくれました。試験中でも応援してくれた日本人の大学生たちは、特にありがたいと思います。日本人と交流したいけど日本語がよく使えない私に話してくれたり、聞いてくれたりしました。また、至る所で回転寿司のお店を聞いてくれたり、私の食べたことがない人形焼きを買ってくれたりした日本人の大学生の星谷さん、伊関さん、有坂さんの親切さは今でも忘れられません。つまり、私たちに対する優しさは表面だけにあふれるわけではない、心からの熱い感情です。それらのような感動は、春の小雨のように常に私の中日友好の心を潤わせています。

このように直接対面して交流することが、中日の理解を促進する効果的な方法に違いありません。一九八九年から今まで、日本財団はずっとその事業に携わっています。中日友好に尽くす笹川陽平会長の精神に感服させられる同時に、「日本語専攻としての私が、なにをするべきか」と考えざるをえないです。

長春師範学院　日本語科 4 年　　金梅花

代えがたい友達、思い出

初めての日本旅行…私にとっては何よりも意味がある勉強になった。

日本という国は私が夢にも行きたかった国であった。私がいつも憧れていた国であった。日本に行って先進国の発達を見た。日本に行って古国の歴史を見た。日本に行って文明国の文化を見た。そして、なんにも代えられない思い出を作った。

日本語を専攻している私達にとっては日本という国は親しみがある国だった。そんな日本で日本人と交流するのは何よりも幸せなことであった。東京大学の見学、日本の大学生たちとの交流会、日本の歴史遺跡の見学、日本文化の体験、みんな忘れない記憶になった。一番印象的なことは沖縄での討論会だった。海に囲まれて波の音と伴って、笹川杯に対しての自分の感じや意見、そして、今回の日本旅に対しての印象や感じを組に分かれて話合った。話し合ううちにみんな心からもっと近くなり、もっともっと仲良くなった。そして、最後は「川流会」という同窓会を作った。川は笹川の川、流は交流の流、私たちが主人公である一つの組織である。短い時間だったけれども私たちの心はもう一つになってしまった。何よりも深い友情で繋がっていた。私もその「川流会」の一人になってとても嬉しかった。時間はもう遅くて真っ暗になったが私達の心は夜空の星達のように輝いていた。

一週間の日本旅が終わった。空港に向かうバスの中で私はこんな感じがした。日本はさすが先進国だなあ。街のあちこちにその痕跡がある。市民たちの素質からもそれが見られる。そして、この文明を勉強してわが国の文明建設に使ってわが国を世界の文明国に作り立つ人は私たちに違いないだろう。今回の旅を経験にしてもっと一生懸命に勉強しなければならないという感じがした。

そして、こんな珍しいチャンスを与えてくれた日本財団と日本科学協会の皆様に感謝の気持ちがした。それに、一週間私達の世話をしてくれた日本科学協会の担当者の方々、藤剣峰記者、付頴記者、張華記者、賈秋雅記者に感謝の気持ちがした。また、私達を連れて行った張鳳傑先生、劉艶先生、朱星和先生、宋頴先生、王越先生にも感謝の気持ちがした。一番感謝したかった人はこのようにすばらしい体験をするように、この世に誕生させてくれ、育ててくれた私の両親であった。

私の初めての日本旅行は私の生涯で一番すばらしい旅行であった。毎日、毎瞬間はいつまでも忘れない最高の瞬間であった。どんな物とも代えられない大切な友達と人々、また、思い出を作った。これから続いていく人生の中、苦しい時や悲しい時に、この思い出を浮かべながら元気を出して笑顔を失わないそんな梅花になりたいと思う。遠くない未来、我々の「川流会」が世界のどの組より繁昌でしっかりした友情で輝く第一の組になるに違いないと私は信じている。私もその組のメンバーとして誇りになると思う。みんな成功して再会するその日を祈りながら…

湖州師範学院　日本語学科 4 年　　顧雅芳

真冬の中の暖かさ　— 訪日感想 —

日本財団及び日本科学協会のお招きで、1 月 24 日に、神様の翼を借りていただき、日本に辿り着きました。それで、1 月 31 日までの八日間の旅を開始しました。杭州から出発の際に、薄い光が見送ってくれました。これがなんだかのよい兆しのように、私たちの訪日の旅が無事に展開できるよう見守ってくれました。

今度の訪日団に参加させていただき、大変嬉しかったです。日本の名所や、シンポルの所を短い時間で見回しました。それに、日本人の方々と同行の友達と忘れられようも忘れないいい思い出をたくさん作りました。

実は、関西空港に到着してから、初めて自分の国から離れる実感を持ち始めました。見知らない日本人に囲まれること

に気付いて、すごく心細かったです。もし、迷子になったらどうすればいいと自分が自分にプレッシャーを与えていました。しかし、その不安は羽田空港に着いたら、暖かい光ですっかり消えてしまいました。羽田までは、もうすでに夜九時ごろだけれども、日本科学協会の担当者は出口のところに迎えにいらっしゃいました。速いスピードで跳ねている心は急に落ち着いた気がしました。二人の方はホテルまで送ってくれました。真冬だけど、身も心も春の暖かさに囲まれ、元気になりました。担当者はそれからの観光日程通りずっと付き合ってくれまして、お陰さまで楽しい時間を過ごしました。日本財団及び日本科学協会の皆々様、どうもありがとうございました。

ところで、内陸で育てられた私は始めて綺麗で、憧れの海を目に映りました。ホテルの前の幕のような緑を超えて、童話の世界に入るみたい、心はぐっと開きました。海はそのまま、うそのように私の前に広げている。手を開けて、この世さえ自分の胸に抱きしめた気がしました。昔のすべての不愉快なことは海水で流れ、心を開き、新たの楽しみを作るべきと私は考えています。もし、中国と日本はこのように新しい紀元が作ったら何よりいいことだと信じています。並びに、この日がいつか来るでしょう。

続きまして、ガイドをしてくれた日本の大学生に感謝の気持ちを申したいのです。東京に滞在中、日本の大学生と交流させていただきました。これは私にとってかけかえのない経験になっています。あいにく、当時は日本の学生の期末試験だが、私たちのために試験の準備時間を放棄し、熱心に東京を案内くれました。その時、ただ東京の建物、風景を見回しただけではなく、若者同士のコミュニケーションのドアも開きました。生活の様子をはじめ、就職活動や、学生生活までいろいろ話し合ってくれて、日本の若者についての普段の姿も大体分かりました。それに、彼らの中国への好奇心、中国のことをもっと理解したがる気持ちも表してくれました。私は、やはり一つの国について理解しようとすると、その国こそ行って見ないと本当のことは分かれませんと考えています。日本の学生の皆々さん、良かったらぜひ中国にいらっしゃって、本当の中国を感じてほしいです。未来の我が世界をさらに輝かせる、自分の心でお互いのことを感じる一方、理解を深め、友好交流を永遠に続くように精一杯頑張りましょう。

八日間の訪問見学を通して、私たちの足跡、笑い声は日本の所々まで広げましたと私はそう信じています。更に、友好の意を含めて、人々の心まで流れ込めばありがたいと思います。それに、私たち、一人一人の力はささやかですので、二人や三人更に多くの人で力を合わせて 4 歳とゼロ歳の子供を大事に育てましょう。この冬の暖かさを冷たくないように守りましょう。我々お互い生き物同士、自分の住み場所を大切すべき、お互いに傷つかないように、心の底からの友好並びに平和の旨代々伝えていきましょう。

南京大学大学院　日本語科２年　王重斌

短い訪日・永い友情

華東地域第３回笹川杯日本知識クイズ大会の優勝者の一人として、黒龍省、吉林省の優勝者とともに、日本科学協会、日本財団の招きによって、１月 24 日から 31 日まで日本を訪問しました。８日間の訪日は私たち２６人にとって、きっと美しい思い出になると思います。

充実したスケジュール表に従い、私たちは８日間のうち何回も飛行機に乗って、東京、沖縄、神戸、京都、大阪、こういう五つのところをぐるぐる回って観光し、疲れはもちろんありましたが、いろいろ見学することができ、たくさんのことを実体験することができるのは、自分の人生で宝物よりも貴重な経験だと思います。本の中から習った日本知識は本当にわずかで、日本に来てから身をもって感じたことは一番大切なものです。

実は日本を訪問することが私にとって、初めてではありませんが、今回の訪日はたくさんの「初めて･･･」を与えてくださいました。初めてしゃぶしゃぶを食べました、初めて温泉に入りました、初めてきれいな海を見ました、初めてこんな短い期間でたくさんの友達ができました･･･

日本の名所古跡を観光しただけではなく、日本の大学生と一日交流しあったこともありまして、若者同士の考え方を交換したり、美味しいそばを食べながら自由に話し合ったりする時間は楽しかったです。「赤まきがみ、青まきがみ、黄まきがみ」というような早口言葉をいくつ教えてもらったこともあります。日本人は英語が下手だとよく言われましたが、慶応大学の広瀬さんの流暢な英語を聞いて、感心しました。船の科学館の夕食で、里見さんの食事のかわいさを見て、みんな思わず笑い出しました。交流する一日は本当に短いですが、一緒に楽しく過ごしたのです。これからもメールで連絡を取るよう約束しました。

日本人の友達ができましたほか、訪日団のみなさんといい仲間になりました。その中、優秀な 4 人の記者も含めています。みんなは違うところから来て、個性を持ちながら、訪日の間、知らない人間から少しずつ仲良くなって、最後は分かれたくないぐらいまで至ってきました。

共通の訪日経験があるため、共通の中日友好の願いがあるため、この後もずっと連絡しようと心の中考えていました。美しい海辺のホテルで夜 10 時まで訪日の感想を一緒に分かち合う光景、一生忘れられないでしょう。そのとき、「川流会」が誕生しました。中日両国の人々は世世代代に友好的に交流し続けようと私たちは祈っています。

楽しい旅でした。私たちの使命感をも起こしました。

私は「川流会」の一員として、これから中日友好を深めるために、たぶん微力ながらもやはり努力したいと思います。自分の目で見た日本、自分の耳で聞いた日本、自分の心で感じた日本をちゃんと周りの人に伝えようとします。

短い訪日ですが、いろいろ体験できて、ここで日本科学協会、日本財団関係の各位に心から感謝の意を申し上げたいです。特にこの度ずっと伴になってくださった顧先生、宮内さん、浅山さんのご親切と優しさは、異郷の日本で寒い冬の中、私たちに春の温かさを感じさせました。ありがとうございました！

南京大学　日本語学科 4 年　初延安

二回目で感じた日本

私は日本知識クイズ大会の優勝者の一人として、日本科学協会と日本財団の招きによって、2008 年 1 月 24 日から 31 日まで、日本の東京、沖縄、神戸、大阪、京都を訪問しました。先ずは、最初から最後までずっとお伴ないになってくださった日本科学協会の担当者の方、そして、お目にかかった日本科学協会と日本財団の皆様方にあつい感謝の意を申し上げます。日本での 8 日間は本当にお世話になりました。私にとって、日本に行くのは二回目ですけれども、皆様のおかげで、新しいことを感じまして、私の人生にとっては貴重な体験になりました。ありがとうございました。

26 人の団体で、最初のよく知らない人達から最後に未練があって、涙まで出てきました。本当に 26 人が本当に良い思い出を作りました。二回目ですから、日本を訪問する事はただの観光だけではなくて、日本をもっと感じたいという気持ちで今回の訪日が始まりました。

先ずは、スケジュールから見ると、毎日何時から何時まで何の活動があるとかはっきり書いてあります。バスの運転手さんの携帯電話番号まではっきり書いてあります。神戸で晩御飯を食べるレストランに、喫煙コーナーがありました。大きなレストランの中で、みんながそのガラスハウスの中でタバコを吸って、レストランの中では空気がきれいに感じられます。電車の場合は、女性専用車、席がないところ、ラッシュアワーのときできるだけ多い人が電車に乗れるように席が立つことができるとか、乗客のために細かい所まで配慮してくれました。これはすばらしい事と思っています。日本ではどこでも細かい所まで配慮します。この 8 日間で出会った日本の友人達もよく細かい所まで考えてくれまして、感心しました。日本での 8 日間はよくそういうことが感じる事ができます。

日本財団を訪問する時、笹川会長が「皆さんが『親日派』ではなくて、『知日派』になってほしい」ということをおっし

ゃいました。その話を思いながら、この 8 日間を利用して、日本をもっと知りたいと考えました。その後、日本の大学生と一日間の交流をしました。その間、一所懸命彼らと交流して、彼らは今何を考えるとか、何に興味を持っていますかとか、今の中日関係についてどう思いますかとか、色々話をして、若者同士のコミュニケーションができました。両国間の若者が意見を交換して、今の相手の国の状況を良く分かってきました。これは教科書や本では絶対学べない内容でした。また若者同士の話が出来て、国境を越えて、違い国の人ではなくて、ただ同じに若者同士の交流をするという感じをしました。コミュニケーションをするうちに、共通な事が発見して、交流を深く進めるようになって仲良くなってきます。それは交流の大切さではないでしょうか？

沖縄で「ひめゆり平和祈念館」に訪ねに行って、お婆さんの話を聞いて、南京大虐殺記念館の事を思い出しました。戦争はどの国にとっても、国民に対する傷害は一番大きいともっと痛感しました。今の平和の社会の中で生きているわれわれ若者たちがその歴史を忘れてはいけないと思っています。その歴史を分かるようになるのは、誰かを憎むことではなくて、その歴史を覚えて、今の平和の状況をもっと大事にして、戦争が起こらず、国と国の間の友好交流に対する、少しでも力を尽くしてもらいたいためのだと私は思っています。

ですから、これから私は日本に留学しに行きますから、日本にいるうちに、もっと日本を理解して、そして、中国のことをもっと日本の友人に紹介して、本当に「理解から信頼へ」を実践したいと思います。そして、日本で見た事を出来るだけ中国にいる日本に行けない友達に紹介して、彼らももっと日本を分かってもらいたいと思っています。日本語学習者として、自分の責任をちゃんと担って、中日交流の架け橋になるようにもっともっと頑張りたいと思っています。

これは二回目の訪日の感想ということになりまして、最後に日本科学協会と日本財団皆様方、また、一緒に付き合ってくれた 4 人の記者方、一緒に行動する 26 人の「川流会」のメンバーたちに改めて感謝の意を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

東華大学　日本語研究科　2 年　黄霞

「知日派」になる大事な一歩

私は大学に入ってから、5 年間ぐらい日本語を勉強し、日本の歴史や文化、社会に関することもたくさん学びました。そのうち、一度日本に行って、「生」の日本を自分の目で確めてみたいなという気持ちが日一日強くなってきました。しかし、学部の四年間はずっと訪日するチャンスを得ず、大変残念がっていました。今回は日本科学協会や日本財団のおかげで、やっとこの夢が叶いました。うれしい気持ちやありがたい気持ちが言葉で表せないほどです。8 日間の訪問研修を通して、いろいろな初体験をさせていただきました。日本の美しい自然風景を味わいながら、発達した現代文明に驚嘆し、日本の方と深い友情も作り、忘れられない思い出ができました。

振り返ってみると、原宿のファッション、賑やかな銀座、浅草の下町雰囲気、沖縄の海、神戸の夜景、京都のお寺、大阪の道頓堀、そのすべてが頭の中に生々しく残っています。しかし、今回の訪日で一番印象深いものは何だろうと聞かれると、やはり日本の方の笑顔です。

はじめて海外に出る私ですから、出発する前にはわくわくするとともに、正直にいえば心配な気持ちも多少ありました。幸いなことに、日本科学協会の担当者の方々はずっと私たちと一緒にいてくれて、日本で生活する注意事項から浴衣の着方まで熱心に教えてくれて、支えてくださいました。その笑顔が私たちの不安を癒してくれました。そのおかげで、私たちも心強くなり、自信を持つようになりました。

日本についた三日目、日本の大学生と一緒に計画を立てて、一日東京を見学しました。日本の大学は今ちょうど試験の時期だそうです。それにもかかわらず、日本の大学生の皆さんはやはりこの活動に参加し、貴重な時間を譲ってくださいました。本当に感謝の気持ちがいっぱいです。慶応大学の杉本さんと高塚さんは私と同じグループでした。二人は浅草や

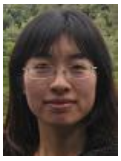
銀座を案内して、日本のことについてもいろいろ話してくれました。そのうち、買い物熱心な私たちはいなくなったり、迷子になったりして、大変面倒をかけましたが、いつも笑顔で「大丈夫よ」と言ってくれました。

そして、方向音痴な私は沖縄で何度も迷子になって道を聞いたことがあります。最初は教えてくれるのかなとちょっと心配しましたが、勇気を出して聞いてみると、ものすごく親切に教えてくれました。助けてくれたタクシーの運転手さんの笑顔は今でもはっきり覚えています。

日本の方のこういう心を暖める笑顔には本当に感心させられました。中国でもそのような素敵な笑顔が増えればいいなと私は思います。

今回の訪日は私たちにとって、決してただの旅行ではなく、笹川会長様の望まれる「知日派」になる大事な第一歩です。訪日団の朱秘書長のおっしゃったとおり、初恋が人生忘れられないものだといわれていますが、はじめての訪日は私たちにとっても、きっとこれから長い人生の宝物になると信じています。

中国海洋大学　日本語研究科　２年　張潔



実現した夢を味わう

今回の遊学は、八日間の間でこんなに多くの「初めて」を作り出した。初めて日本の国土に足を踏み出した。初めて自分の肌で日本を感じた。初めて日本のおいしい空気を満喫した。初めてそんなに多くの日本人と接触して日本人に対しての実感ができた。私はうれしいか、ショックか、感激か、感嘆か、一言で言い切れない。一生忘れがたいことがいっぱいあるが、一番印象に残ったのはやはり東京の上野公園でボランティアに出会ったことと沖縄で迷子になったことです。

日本人の大学生のお供で魯迅先生が『藤野先生』の中で言及した上野公園に行った。公園の入り口で黄色い作業服を着た何人かと出会った。私は西郷隆盛の銅像の下で記念写真を撮っているあいだ、日本人の学生はその中の一人を連れて私たちのほうへ来た。その方はガイドとして私たちを案内してくれた。そのガイドはボランティアだと気づいたとき、私たちは驚いた。彼のことについて興味を持つようになっていろいろ聞きました。彼は今年７２歳で、定年した。歴史に対して興味があるし、何か有意義なことをしたいから、ボランティア協会に入った。協会からお金をもらわないどころか、毎年協会に年費のようなお金を提出するのだ。これは中国のボランティアとはだいぶ違う。中国のボランティアは大体若者だし、交通費ぐらいの経費でも自分で負担する場合は少ない。なぜそんなに違いがあるかと考えたり、一緒に検討もしたが、観念の問題かというより、むしろ現在の中国の経済力で決めたことではないかと考える。中国人の主体は農民で、彼らは６０歳になっても、６５歳になっても定年がなく、力があれば働くのだ。そんな人たちは勤勉であっても、興味があっても、ボランティアする余裕がない。都市で住んでいる人たちは定年して、孫の面倒を見たり、自分の仕事を続ける人が多い。もちろん、怠け者もけっこういるかもしれない。要するに、中国ではまだ「ボランティア」という観念がまだ薄い。

今年オリンピックが北京で、ヨットの試合が青島で行われる事になった。地元の多くの人がボランティア活動に参加した。これをきっかけとして、これからの「ボランティア」意識が少しでも強くなるかなあと思う。中国に戻って上野公園で出会ったボランティアのメールをいただきまして、とてもうれしかった。彼の情熱は私を盛り上げた。年寄りになったら、彼のように何かしたい。

今回の遊学でいろいろなところへ行って、どこもそのところが持つ独特な風景があるし、どこも美しい、東京のきれいな日本語、神戸の有馬温泉、京都の古い寺、大阪のにぎやかな町、みんな大好き。しかし、一番大好きなのはやはり沖縄だ。沖縄の熱帯風景が魅力的で、みんな日本語をしゃべり、日本人であるのに、どこか雰囲気が違うように思う。沖縄の海、沖縄の獅子、沖縄の首里城…とりわけ沖縄の夜はわすれがたい。

というのはその夜、私ともう一人の女の子は国際通りでぶらぶらしてつい時間を忘れた。気付いた時はもう１１時ぐらいだった。地図を見ながら帰り道を探した。時々バイクがそばから飛び去ったし、道の両側の電灯も少ない。すこし心細いが、友達は「ここは日本だから、大丈夫」と言って、私も元気になった。幸い、ホテルの辺りに行ったが、ホテルはなかなか見つからなかった。そのとき「無料案内所」を見た。聞いたら無料で親切に教えてくれて、やっと助かった。このことは私がいつまでも異国で経験した忘れがたいものとして大切にする。

日本から帰ってもうする一ヶ月になるが、顧先生、宮内さん、浅山さんの笑顔は昨日見たばかりの感じがする。空港で顧先生と会ったときも、家に着いた感じがした。みんな家族の人のようで、親切してくれて、本当にうれしくてたまらないほどだった。昨日、『蛍の光』というドラマを見たら、「表参道」が目についた。そのドラマが自分のそばで起こったもののように感じた。日本に行って本当によかった。

上海杉達学院　日本語学科　4 年　張定彦

一生忘れられない思い出

今回は日本科学協会の招聘で、私はクイズ大会訪日団の一員として日本に行きました。日本で最高な八日間を過ごし、一生も忘れない思い出を残しました。

最初関空に着いた瞬間に「日本だ！」という実感と感動が湧き上がってきました。 テレビや雑誌でしか見たことない所に自分がいるのはほんとに不思議なことです。

八日間に、東京、沖縄、神戸、京都、大阪など五つの町を回りました。東京で日本の大学生たちが私たちを案内してくれて、いろんなところにつれてもらいました。浅草で東京の下町情緒に触れ、東京ミッドタウンで広々とした緑地に癒され、お台場のきれいな夜景に感動されました。そして、彼らといろいろな話で盛り上がり、友達になりました。また、沖縄できれいな海を見ることができ、京都で美しい金閣寺と清水寺を見学しました。「清水の舞台から飛び降りる」ということわざに出ていた舞台を自分の目で確かめました。そして、神戸で神戸港と中華街に行きました。神戸は街がお洒落ムードで､外国にいる感じがしました。震災後こんなカラフルで真新しさ漂う街を復興させたのは本当にえらいと思いました。大阪で中国で知り合った日本人の友達に会って、一緒に楽しい時間を過ごしました。この八日間に経験したすべてが私の頭に深く刻まれて、一生忘れません。

この八日間の中で、いつも考えていたのは、中国と日本の相違点です。中国と日本は近い国同士ですが、違うところもたくさんあります。お箸の置き方や、乾杯の仕方など、その違いを感じることが面白いです。帰国後、日本で見たもの、経験したことを周りの人に伝えます。自分は日本語を勉強しているから、それを生かして、中日友好のために力を尽くしたい、日本人と中国人を仲良くさせたいと思います。

八日間にずっと私たちと一緒にいていた日本科学協会の担当者の方々は、いろいろ教えてくれて、細かいところまで配慮してくれました。帰る日に、日本科学協会の梶原先生と顧先生が空港まで見送りしてくださいました。本当にありがとうございました。

飛行機が飛ぶ前に、日本の土地に向かって、さよならのかわりに、また会いましょうと言いました。いつかまた日本に来ると信じています。

日本、また会いましょう！

浙江工商大学　日本語学部　4 年　孫燕

「きっと、いつかまた…」

ずっと夢でした、日本へ行くのは。

やっぱり夢みたいでした、今度の日本への旅は。短いけれども豪華な充実な八日間でした。高級な料理を食べ、憧れていた場所もたくさん足を踏み、とてもきれいな海を見、温泉まで入りました。私は何でそんなに幸せでしょう。

実は日本へ行くのは初めでしたが、不思議なのは異国と思いませんでした。たぶん肌も髪も同じ色かも知れません。中国とただ通じる言語が違うと思いました。

でも、小さいところをよく見れば、やっぱり日本です。高いビルではなく、華やかな街でもなく、他の人の気持ちを良く考えて礼儀正しい心です。道を歩いてみるとなんだか変と思ったら、曲がる方向が違うの他、意外に静かできれいです。ごみを捨てる場所もなかなか見つかりませんでした。お手洗いにお子さんの遊び場もあり、育児室も何回も見ました、お母さんたちにとってどんなに助けになるでしょう。エスカレーターでもよく人に注意しています。そして、人々は決まって一側に寄り、急いでいる人に道を譲っています。突然、雨になってもホテルがかさを貸してくれます。道に迷ったら、人に聞くと、できるだけ助けてくれます。日本で地球に優しくしでくださいという考えをよく教えてくれました。ごみも細かく分けるし、ホテルの品物もできるだけ再利用しています。日本のサービスは誰でも認めるでしょう、そんなに親切してくれます。

同時に、日本の街で中国人を見ることは珍しくない、中国の品物や料理を売っているところも多いです。そして中国風の建物もたくさんあります。特に沖縄の首里城とか国際道とかでよく中国のにおいがします。

私はやっぱり日本が好きです。まだまだゆっくり体験したいです。日本のことをもっともっと勉強したいです。日本を離れる時、とてもつらかったです。でも、「きっと、いつかまた」と自分を慰めました。その時はきっと新しい自分を見せます。これは日本との約束です。

日本にいた八日間本当に勉強になりました。自分の目や手などで日本を感じられることだけではなくで、自分にチャレンジしました。ふだん家から出らなかった自分は井戸から空を見ていた蛙のようでした。日本にいた私はずっと先生方々や友達のお世話になりました、でも、わたしは、やっぱりいつも人を頼りにしないように頑張りました。他の人が困ったとき、必ず喜んで手伝います。でも、わからないことがあったら聞きます。日本では日本なりのルールがあるから、守らないと失礼なことになるかもしれません。そして、いろいろ体験した後、なんか成長ましたなあ。そして、自分の気持ち素直に伝えたいと、自分をよく表したいと強く自覚しました。ですから、焦らずにゆっくりでいいから、勇気を出し、自信を持ち、元気な自分になりますように努力します。

このたびは私の一生の宝物です。日本との絆が深くなりました、そしてたくさんの友達ができで、本当に嬉しかったです。みんなさんは日本語がとても上手で、一人一人夢を持っている優秀な人です。奇跡のような出会いですから必ず大切にします。

そして、わたしも自分の夢を目指し、前向きで頑張ります。